

は一日その繪を三輪さんから借りて、私の家に持つて歸り、両親に見せたものです、然し餘り褒めないで、私は大變に失望致したこともありましたが、其後三輪さんは、先生と一緒に八王子の方に寫生に行かれた時、又水彩畫を二三枚寫生された。それが秋の景で、錦の様に紅葉が山に一面彩られて、その下に農家が列んで居た圖です。セピヤで古い家を描かれたのが、恰も實物を見る様な氣がしました。今三輪さんは何所に奈何して居られるか、一度其時の畫を見たいものと思つて居ます。若し三輪さんの畫が見られぬならば、せめて其時三輪さんの畫を見て得た感喜だけでも得たいものと思つて居ます。(未完)

糸満の割舟に就て

糸満は琉球の首都那覇から二三里許りの處にある漁村で、圖は其處の漁船を描いたものである。往昔は皆この船に乗つて海上遙かに臺灣あたり迄出掛けたさうだ、若し不幸にも、途中で暴風等に遭遇した折は、舟と舟とを三艘位結び合せて、風のまにまにまかせて置けば、轉覆の恐れもなく至極安心して居る事が出来る、又若し一艘丈けて覆へつた折には、一人で元に戻して平氣で漕ぎ戻る事が出来るさうだ、だから始めて汽船が此の地方へ航した折には、皆若しあの船が引覆つた時にはとても元にかへすことが出来ないからと云つて誰も乗るのを恐しがつたさうだ。

(吉田博氏談)

私に畫か描けたらば(一)

磯 萍 水

私に畫か描けたらば、私は何を描くでせう、難かしい問題です、迂濶には答へられません、

文字でさへ、満足に書けない私が、何で畫がかけませうか。

然し私は、自分で答へやうが爲めに、此問題を提供したのですもの、實は少しばかり、二用意はして有るのです。

私は忙しい裡の休息を利用して、大擱みに其二三を擧げたいと思ひます。

私は山でも水でも、有の儘を描き出すに留まらなくて、その時々氣分を表はしたいのです、色でもよい、線でもよろしい、そして線には、『山岳家の見たる山の色』とか、『水郷の塵火』とか、『飛驒への途』とかつけて、觀る人に注意を與えて置くのです、私はその題によつて、私の得た二三の印象を並べて見ます。

秋でした、私が一人で、鳥居峠の頂上の鳥居の前に立つたのは、落日の光りが、精あるものやうに、見る／＼雲の裡に舞ひ込もうとして居る、風は嘆のやうな音を立てて、空の空の彼方から落ちて來て、私の襟を吐りて、袖を飜がへして、すぐ脚の下の椽とちの森を管めては、一散走りに、範原の宿をいじめにかかつて、その板戸をゆるがして、爐の楯火を騒がせやうとして居る、群山の中の落日の秋の暮、實にこの時の氣分を、謂ひ表はすのは、くどく／＼した文句などを並べる閑はない、悲壯の一語でもら謂ひやうはない、落日よ、落日よ、私の好きな落日よ、私は

日の出と謂ふものを好かない、海洋の日の出、山上の日の出、
壯は即ち壯ですが、昇りきつて了ふと、毎日見つけて居るから
今うけた印象はこの平凡の爲めて消されて了ひます、そこへ行
くと落日です、寂しい寂しい彼の色彩は、どうしても胸を抱か
ずには居られない、落日は日の出のやうに、平凡な姿を現はす
のではないから、受けた印象はその儘に胸の裡に納めておく事
が能る、やがて来るのは暖い夜です、つまり幕の閉ぢやうがう
まいのです、私は鳥居峠の秋の一日の、雲に落行く落日の、雄
々しいながら、謂つてもつくせない寂しい走りに、眼をしぼだ
たいたのでありました。而も此時、風に吹かれてか、山の力で
か、當面の御嶽は、宛然大の男が帷幕をかゝげて姿を現はずや
うに、雲おしわけてぬうつと顔を出しました、私は思はずも、
帽をとつて丁寧におじぎをしました。

さあ、これだけでは餘りに平凡です、落日も此れに限つた事では
なし、御嶽の出現も既に多くの人の眼のつけ處です、格別に
申添える程の巧能はありはしません、描きたいのはこれから
です。

丁度通り合した薬賣りが、あの山、この森と指さして教えてく
れながら、なぜか聲をひそめて、教えてくれたのは、向ひの山
の色の裡に、それと、謂はれて漸く辛じて、それかと氣のつく
位の一筋の線でした、

線としか謂へません、然しこれはこの木曾山中から、森をぬけ、
谷を涉りして、七日かかるか十日か半月か、その間には三日に

してまだ日の光を見る事の能きない森もあらう、山蛭は襟に落
ちかかつて、その血ばかりでなく、骨までも枯さうとして待構
えて居るであらう、毛の白い猿は、人間の瞳をほほさん、胸に
飛びついて来るであらう、この人外の麼道は、その線です、そ
の線をたどつて行くならば飛驒へ行けると謂ふけれども、果し
て恙なく行き得やうか、恐らくは、山蛭の腹を肥やさうに、
私ははつと思ひました、襟が冷めたくなりました、浮んで来る
考は彼の鏡花の『高野聖』です。

落日の名残に、僅に幽かに、それと見えます、暮の色が素早く
はびこつて行く山々の中に、針をひいた程の線、それも勿論同
じ色でした、この線が、十日かかるか、半月かかるか、そして
また無事に人間の顔を見る事が能るか、謂ふ一路、飛驒への
途です。

私はこの時つく思ひました、私に畫が描けたらば、ここを
描く、消え行かんとする落日を山の脊にして、群がる山の山の
中の一路、山と同じ色の中の同じ色の一路、殆んどあるかなきか
の一線を主腦として、一圖を構成して見たいとつく思つた
のでありました、これが『飛驒への途』の繪模様です。(つづく)

太平洋畫會展覽會は去る廿一日より上野竹の臺陳列館中部に開
會せり、出品點數は水彩畫百八十點、バステル畫四點、油畫百八
十二點、彫刻四十一點、合計五百十一點、